

教員のセルフマネジメント力向上を目指して —リフレクティブ・プラクティスの実践—

関戸 冬彦^[1]

Aim to Improve the Quality of Self-Management for Teachers -A Case of Reflective Practice-

SEKIDO, Fuyuhiko^[1]

アブストラクト

本稿は経験主義学習に基づく「振り返り」に着目した、リフレクティブ・プラクティスに関する現時点での暫定的な実践報告である。まず、リフレクティブ・プラクティスとは何かを先行研究と共に簡潔に説明する。次に、実際に行っている実践がどのようなものであるのか具体的に報告する。そして最後に、今後の展望などについても言及する。

In this paper, the practice of “reflective practice” will be temporarily reported at the moment. First, the meaning of “reflective practice” will be explained with previous studies. Next, an actual case will be introduced with details. Finally, the future of this practice will be referred.

キーワード：リフレクティブ・プラクティス, 経験主義学習, 教師教育

1. はじめに

本稿は経験主義学習に基づく「振り返り」に着目した、リフレクティブ・プラクティスに関する実践報告である。まず、リフレクティブ・プラクティスとは何かを先行研究を引用しながら簡潔に説明する。基本的にこれは教員のセルフマネジメント力向上につながるものと執筆者は捉えている。次に、この考えに則って実際に行っている実践例を具体的に報告する。この活動を始めたのは2019年の9月末であり、つまり本稿執筆時にはまだ3か月ほどしか経過していないので手順ややり方などの方法的な部分は明記出来ても、本稿は現時点ではまだ中間報告なものにしかすぎず、効果検証など念入りな研究は今後に譲りたい旨を先んじてここに記しておく。そして最後に、このリフレクティブ・プラクティスの活動を研究対象としての一事例に留まらず、どう今後この活動そのものを発展させていくか、などの展望についても少し言及しておきたい。

2. リフレクティブ・プラクティスとは何か

リフレクティブ・プラクティスとは玉井、渡辺、浅岡（2019）¹によると「実践者が自身と自身の実践経験を、リフレクションを通して内省し、自身の実践についての理解を深めることでより豊かな実践者へと成長していくための実践研究法」であるという。つまりそれは、自分の行った授業実践を客観的、あるいはメタ認知的に意識し、考察することで気づきを得て、次の行動へと促すサイクルであると言える。ここで重要なのが「リフレクション」であり、玉井 et al.(他)（2019）²はこれについて、教師教育のコンテキストにおいては「経験をふり返ることで新たな意味解釈を引き出し、自身と自身の実践について理解を深めることによって問題の解決や成長を志向するための実践研究法」としている。要は、自分の経験したこと、ないし経験した自分自身をよく知ることこそが次への一步につながっていく、と換言出来るだろう。いわば、教師のための経験に基づいたメタ認知サイクルである。玉井 et al.(他)（2019）³ではその対象を主に中高の英語教員、教育実習生、などの英語教育での現場に例においているが、これを分野を問わずに実際に現職の教員、特に大学の教員、を対象に行ったらどのような効果や反応があるのだろうか。この問いに対し自ら試みたのが次の章での実践事例報告となる。

3. 実際の実践、活動事例

今回の実践は、先にも述べたように大学の教員に対して行った。執筆者も大学の教員であり、分野こそ異なれど、同じ大学教員という立場の者同士、合計5名でのグループでの振り返りである（なお、執筆者は大学の英語教員である）。この活動に参加を表明してくれた4名とはそれぞれEMS（エッセンシャルマネジメントスクール：西條剛央が主宰するメタ大学院）で知り合いになった。また、この振り返りという手法を強く推奨していたのは同じくEMSを通じて知り合いになった鈴木利和であり、鈴木が主宰する「ありえる楽考」⁴もこの活動に大きな影響を与えている。なお、5名はそれぞれ地理的には日本国内でなければならぬ所に居住しているので、どこかある特定の場所に集まってというリアルな対面式ではなく、Zoom というオンライン会議システムを用いてオンライン上で行った。時間は毎週日曜午前8時半からと決めており、2019年9月末から特殊な事情があった場合を除いて12月末まで必ず毎週日曜に定期的に開催した。

活動の流れとしては冒頭の数分を「チェックイン」と呼び、24時間以内にあった感謝したいこと、ないしこの1週間で印象的だったこと、などを各自が手短かに話す。これはウォームアップ的に場の空気感を作るためのものである。その後、5名のうちの誰かが主に自分が行った授業について、その週で気がかりだったことや迷いを感じたことなどを共有し、それに対し聞き手である4名が感じたことを話したり、時に質問などをしたりする。その際、振り返りのプロセスを可視化させるために先の「ありえる楽考」で用いている「ありえるシート」（図1）を転用することもある。このシートは最初の状態（左側）からどのようなことが起き（真ん中の一）、そして現在どうなったか（右側）を自分の言葉を用いながら書き込み、客観的に見られるようにするものである。また、最後には次へのアクションも記入するので行動変容も促される。加えて、これを他者に見せながら話すことで、自分をメタ認知的に理解出来るためのツールでもあるので、そういう意味ではリフレクティブ・プラクティスの意図にもうまく合致しているシートであると言える。

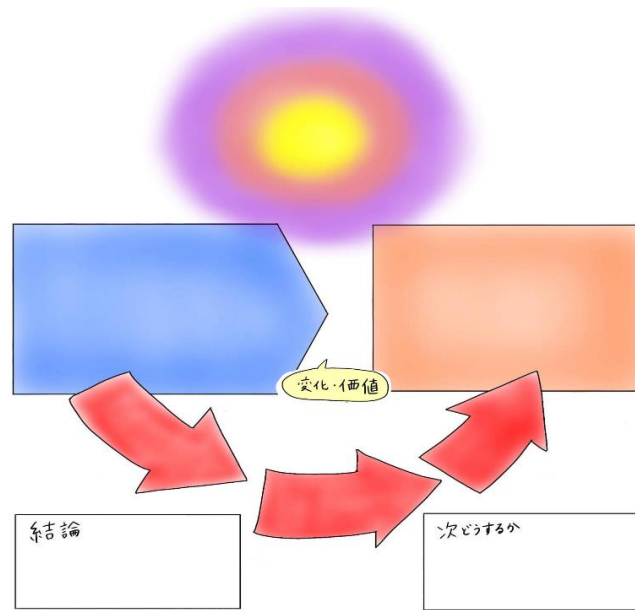


図1 ありえるシート

なお、5名はそれぞれ教員としての経験年数が違うので似たような事象でも捉え方が違っていたり、あるいは経験豊富な誰かがアドバイスのコメントをすることもあるが、基本は身分的に上下関係なくフラットな関係性であるので、この5名内に序列のようなものは存在しない。おそらくここが、同じ職種でありながらも同じ職場ではないことの利点だろう。同じ職場内ではどうしても上下関係的な、もしくは役職的なことが意識されてしまうので、場合によっては自由に発言出来ない、などということも想定されうるが、この5名内においてはそういうことは起こりえない。

また、それに派生して大学内で組織として抱えている問題点や教員としての在り方などにも話題が及ぶこともあり、いわば教育をめぐるディスカッションのような様相になることもある。得てしてそうしたやりとりを続けるうちに、各自がその時々で響いたものを持ち帰り、また新たな1週間を過ごすので、徐々にそれが習慣化され、中には行動変容が起きていたりもする。具体的な参加者個々のことについては本稿内では省略するが、活動における役目としては執筆者がファシリテーター役を担っているの、あくまで主観としてではあるものの、それは認識出来ると言える。というのも、日曜の朝に誰かに強制されたわけでもなく、個々が自発的に休むことなく参加し、かつ積極的な発信や意見交換というやりとりを続けていること自体がすでに損得や利害を超えた主体性の現れという行動変容そのものにほかならないからだ。

つまり、リフレクティブ・プラクティスを教員同士で行うことは教員の自己内省が促されるので、それはセルフマネジメント力の向上に寄与していると言えるだろう。ここでいうセルフマネジメント力とは、授業における自分自身の振る舞いをコントロール出来る力であるのと同時に、行った授業を俯瞰的に見て検証出来る力を指す。その際に有益な部分として特筆すべきなのが、それを個々で行うのではなく、グループで行うことでお互いの気づきや励まし合い、理解される

ことの肯定感などがあるのだが、そうした個々の事例、箇所の詳細な検討、また参加者の声やその客観的分析に関しては今後の研究課題としたい。

4. おわりに

本稿ではまずリフレクティブ・プラクティスとは何かを簡潔に説明した。それは、自分の行った授業実践を客観的、あるいはメタ認知的に意識し、考察することで気づきを得て、次の行動へと促すサイクルであった。次に、実際に行っている実践例を具体的に報告した。今回は Zoom というオンライン会議システムを用いて、週に1度日曜日の朝に5名のグループで行った。活動の詳細としては、チェックイン後に個々が振り返りの共有を行い、メンバーがそれぞれコメントをシェアすることで自己理解と他者理解とを深めるというものであった。3の最後に記したように、本稿では参加者の変容に関する客観的な、特にデータ分析などは含めなかった点はその点は今後の研究課題である。また、このようなメンバー、大学教員やそれ以外の機関の教員も含めて、がさらに集まるのであれば、執筆者ないし適切な人物がファシリテーターとなり、複数のチームでも展開出来るだろう。もしそのように複数のチームが存在した場合、それぞれのチームでどう違うのか、あるいはファシリテーターになった場合とそうでない場合とでは何か違いがあるのか、などの詳細な研究テーマを別途設け、より踏み込んだ活動やそれに伴う分析も出来るだろう。そのような活動、研究を積み重ねていくことで、よりリフレクティブ・プラクティスの意義が明らかになっていくだろうし、それが結局はよりよい教育環境を創り出す一要因になるのではなかろうか。そのような期待と提言をもって、本稿の結びとしたい。

参考文献

- [1] 玉井健、渡辺敦子、浅岡千利世. “リフレクティブ・プラクティス入門”. 初版, ひつじ書房, 2019年, (p.1).
- [2] 玉井健、渡辺敦子、浅岡千利世. “リフレクティブ・プラクティス入門”. 初版, ひつじ書房, 2019年, (p.56).
- [3] 玉井健、渡辺敦子、浅岡千利世. “リフレクティブ・プラクティス入門”. 初版, ひつじ書房, 2019年, (p.109-p.163).
- [4] 鈴木利和. “セルフマネジメントを目指したコーチング手法の考察 – ありえる楽考の取り組み”. アカデミック・コーチング研究. 2020年, 創刊号(発刊準備中).

著者紹介

関戸 冬彦

1997年 明治学院大学文学部卒. 2008年 同大学大学院博士後期課程満期退学. 文学博士. 2019年より, 白鷗大学准教授. 現在に至る. 文学と英語教育の研究に従事. アカデミック・コーチング学会理事, 日本アメリカ文学会, 日本英文学会学会, 大学英語教育学会各会員.